

# 水ぼうそう対策

---

## 早期投薬で重症化防ぐ

12月から1月にかけて流行する水ぼうそう（水痘（とう））。軽い病気と思われがちだが、皮膚から細菌が2次感染して、あとが残ったり、体内にうみがたまったりすることもある。薬による早期治療や予防接種による感染防止など、水ぼうそう対策を紹介する。（館林牧子）

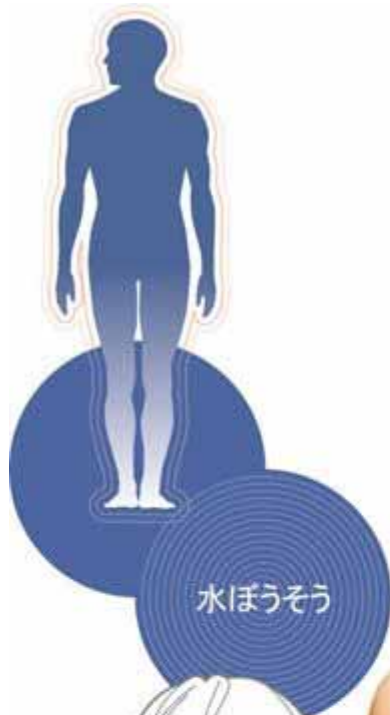
## 症状

水ぼうそうは、ヘルペスウイルスの一種が初めて感染した時に起きる病気だ。かつては4～5歳でかかる子どもが多かったが、小さい時から保育園に通う子どもが増えたため、最近では1～2歳での発病が最も多い。年間推計で約90万人が感染する。

ウイルスに感染してから2週間前後の潜伏期間があり、突然、発疹（ほっしん）が出始める。体中にびっしり出る場合から、ぽつりぽつりと出る場合までさまざま、約7割の子どもは発熱する。

ほとんどは1週間から10日で発疹が黒いかさぶたになり、病気は治る。だが、弱くなった皮膚から黄色ブドウ球菌や溶血性連鎖球菌など身の回りに存在する細菌が感染して、体内に入っとうみがたまることもある。

東京都の8か月の女兒は、発疹が出た数日後、高熱でぐったりして、左足の付け根が腫れ上がってきた。皮膚から細菌が体内に入り込み、うみがたまっていた。緊急入院して細菌を殺す抗生物質の点滴とうみを取る手術を受けた。



水ぼうそう

### 水ぼうそうの重症度



軽症

全身の発疹の数が50個未満



中等症

全身の発疹の数が50個以上、500個未満



重症

全身の発疹の数が500個以上

デザイン課: 遠藤牧子

- 12月から1月に最も流行
- 最近では1～2歳の発病が最も多い
- 年間推計約90万人が感染
- 潜伏期間が2週間前後



はやめの対策が重症化を防ぐのに有効です

かかる前に



予防接種

任意接種なので費用は自己負担

約85%を予防

かかってしまったら…



ウイルスの増殖を防ぐ薬

発病直後に服用することによりその後の発疹の数が減る

重症化を防ぐ

2か月後、ようやく退院したが、3人の子どもを持つ女兒の母親（36）は「これまでの育児経験から水ぼうそうは軽い病気と考えていた。こんなに怖い合併症があるなんて知らなかった」と話す。

女兒が運ばれた東京・日赤医療センター小児保健科部長の菌部友良さんは、「幸い抗生物質が効いたので治ったが、最近では抗生物質が効きにくい耐性菌もあり、非常に治りにくい場合もある」と指摘する。

2次感染が起きる頻度は1～4%。皮膚に深い穴が開いて、あとが残ったり、うみの周囲の組織が壊死（えし）して後遺症が残る場合もある。これとは別に、極めてまれだが、5万人に1人程度の割合で、脳炎などを起こして死亡することもある。

## 治療

水ぼうそうにかかってしまった場合、ウイルスの増殖を防ぐアシクロビルという薬で治療することができる。今春からは、この薬に改良を加えた塩酸バラシクロビル（商品名バルトレックス）も小児の水ぼうそう治療の認可を受け、使えるようになった。アシクロビルは1日4回飲む必要があったが、バラシクロビルは効果の持続時間が長いため、1日3回の服用で済む。

いずれの薬も、発病直後に飲むと、発疹の数が飲まない場合に比べて少ないというデータが出ている。「発病して4日目くらいまでに発疹の数がぐーっと増える。ぼつぼつが出たら、なるべく早く小児科を受診し、薬を飲み始めるのが重症化を防ぐコツ」と水ぼうそうに詳しい藤田保健衛生大小児科教授の浅野喜造（よしぞう）さんは話す。

## 予防接種

水ぼうそうの予防接種の特徴は、「副作用がほとんどない」（浅野さん）が、接種を受けても水ぼうそうにかかってしまう子どもが約15%いること

だ。ただし、国内外の追跡調査で、予防接種後の水ぼうそうの8～9割は軽症で済むことがわかっている。

米国では1996年から予防接種が定期接種に組み入れられ、約9割の子どもが受けている。導入後5年で発病者数が7～8割も激減した。日本では親が自己負担で受けさせる任意接種のため、接種率は約35%。費用も医療機関によって、5000円～1万円程度かかる。原則として1歳以上の子供が対象だ。

(2007年11月30日読売新聞)